茨城キリスト教学園高等学校同窓会報

ZION シオン

No. 44 2024

●ZIONコレクション― 13

「ハンドベル」

ハンドベル部の創部は 2016 年。それ以前はコーラス部によって演奏されていた。時空を超えて受け継がれ、奏でられている。

"待ってました"二松亭ちゃん平先生

◆授業と落語、二足のわらじを履いてます

国語担当　教頭　斎須 博 先生

いよっ、待ってました!二松亭ちゃん平、真打登場!!と、待ち構えていたインタビューの場に現れたのは、シュッとしたブルーのスーツにオシャレなネクタイ姿の斎須博先生。当たり前だ、ここは学校の応接室。高座の着物姿のイメージが吹っ飛ぶ。たった今まで重要な会議があったとか。学期末で超多忙、なのに翌日も高座の予定が。無理矢理お時間頂戴しました。

二松亭ちゃん平こと斎須博先生は、今や学校内外の有名人で超売れっ子。年間数十件の高座をこなす。近年は、社会人落語日本一、目黒区創作落語最優秀賞など実力を認められ、アマチュア落語のトップレベルに。先生の落語は古典であれ創作であれ軽妙洒脱な江戸弁で、聴く者を知らぬうちに噺の世界に引きこんでいく。十八番の学校ものの創作落語などはホロリとしたりクスッとしたりのオチがいい。ところが、噺の中に時として茨城弁の登場人物が出没してくる。ん!?これはほぼネイティブスピーカー。就任当初は気になっていた茨城弁訛りが、ひと月もするとすっかり耳に馴染んでしまっていたという。数年前からは高校に落語研究会ができて顧問を引き受けている。文化祭に生徒と共演もする。大喝采だ。

高校時代の体育祭で

・・・

神奈川県藤沢市のご出身。1967年生まれの57歳。高校時代、冬の間は走ってばかりの水泳部と、掛け持ちでフォークソング部、「ステージで歌いはじめるとざわついちゃう。曲の合間のおしゃべりの方が格段ウケが良かった」。

そして、ギターを片手に国語の授業をする担任に憧れ、先生のような国語の教師になりたくて二松学舎大学文学部に進学し、落語研究会にも入門。学生チャンピオンも輩出した落研はなかなかハイレベル。先輩師匠から正座して厳しく稽古をつけてもらった。二松亭ちゃん平の高座名はその時からだ。

卒業後、一年間システムエンジニアに、だがどうも向いていない。やはり国語の教師になりたい。念願かない縁あってこの高校で教鞭を取ることになった。1990年のことだ。今年で34年になる。先生の落語を聴いた卒業生も多いはずだ。

・・・

現在は教頭で入試広報も担当する。小学校や中学校から二松亭ちゃん平先生にオファーがかかると、高校のパンフレットを抱えていそいそと出向く。本領発揮である。「よその高校はライバルだからお断りする」。そりゃそうだ。「うちの生徒をほったらかしにしてよそでやるわけにはいかない」。生徒には学年末最後の授業に千穐楽の一席を聴かせる。さて、公演依頼は引きもきらず。県立図書館や生涯学習センターのほか、卒業生や保護者など学校に縁のある方々が声をかけてくれる。「あ、もちろんノーギャラです」。我が校は卒業してからの付き合いがものを言うのです。

・・・

さて、もうひとつ高座の印象と違ったのは、鍛えられたそのたたずまい。何かトレーニングされてるのでは?「走ってます。年取ったなと自覚しながら。勝田マラソンは10キロコースを走ります。卒業生が沿道で応援してくれたり、追い抜かれたり。若い頃は教員チーム作ってフルマラソン走ったりしたけど、今は無理」。それでも、夢は定年後にホノルルマラソン。「それまで気力体力を維持して世間に止められないようにしとかなくちゃ」。今は家の近所の水戸西部図書館や大塚池を落語を聴きながら走る。

・・・

国語の授業は文学ばかりでなく評論も課題となるらしい。ちゃん平先生は正論を導く授業と、人間の業を肯定する落語(立川談志曰く)の二足のわらじを履きこなす。なかなか、もう二足ランニングシューズも履いてます…。お後がよろしいようで。

あの頃を語る

吉澤達巳（28回生）

熊谷先生（前列左）、吉澤さん（後列右から２人目）

もう一度、人生があるならば「シオン生」だけを目指したい！

＊タイトルは、話を伺った２８回生吉澤達巳さんがインタビューの最後に語った言葉です。

編集部：なぜタイトルのように思うのですか？

吉澤：それは…滑り止めの学校とバカにしていたけど、今思ってもいい学校だったので可能であればシオンだけを目標に受験してもう一度人生をやり直したい、と思うんだよ。

＊卒業して46年、今も高校時代のことを鮮明に覚えている吉澤さん、思い出が溢れるほど語ってくださいました。

編集部：現在水戸で豆腐料理「一丁」を営んでいますが、始めたきっかけは？

吉澤：元々うちが豆腐屋だったこともあります。それとサッカー部の顧問の熊谷芳郎先生との出会いです。今の私があるのは熊谷先生のお陰です。先生に進学をすすめられ大学に進学をしたのですが、山梨で一人ぼっちで生きるのも必至だったときに、アルバイトをしていた店のマーボー豆腐を見て、実家が豆腐屋だったこともあり料理に興味がわいたことがお店を始めるきっかけになりました。また熊谷先生には進路だけではなく、サッカーのルールはもとより、人生のルールなど多くのことを教えて頂きました。

編集部：サッカー部に入ったきっかけは？

吉澤：中学時代から足が速かったので、先輩に誘われるまま入部しましたが、当時はスポーツ根性ドラマがはやっていて、部活をしているとモテるような気がしたからですかね～（笑）。

また、その先輩に応援団にも強制的に入れられました。今でいう二刀流ですね。応援団は野球部の応援だけでサッカー部は一度も応援されませんでしたが…

編集部：サッカー部での思い出は？

吉澤：そうですね。当時サッカーに目標もなかった我々に、熊谷先生が見かねて多賀高との合同練習の場を作ってくれました。日立電鉄に乗り、多賀高に行くのは楽しみでした。また他高と練習試合をするときにも芝生のグランドはなく、試合前にグランドの石拾いから始めたことも良い思い出です。その時にコンクリートブロックにぶつかりケガをしたことも、その傷は今でも残っています。

編集部：サッカー部の成績は？

吉澤：公式戦では勝ったことはありませんでした。３年生の最後の試合では、今までにない最高のシュートをしたのですが、なんとオウンゴールをして１－０で負けてしまいました。そのゴールは自分で言うのもなんですが、本当にカッコよく今でもコマ送りで覚えています(笑)。

編集部： これからやってみたいことはありますか？

吉澤：同窓会をやってみたいです。今まで一度も開催したことも無く、もしかしたら自分が知らないだけかもしれませんが…今までも開催したくて何度か呼びかけてはいたのです。数年前にはfacebookに私の携帯番号まで載せて呼びかけたのに、一件も問い合わせなかったのです。こんな私だからでしょうか？

編集部：う～ん、確かに高校時代の写真は怖そうですが（汗） 開催できるといいですね。

吉澤：はい。同窓会やりたいです。28回生お願いします。

編集部：そうそう同窓と言えば、奥様も同級生ですね。（旧姓：田中優美さん）

吉澤：はい。私は高校に通うのに家から駅まで約３キロを汗だくで自転車を走らせていくのに、シオンの制服を着た女子がバス停に立っている。それもバスで２区間のところで歩いても駅はすぐなのに、身体が弱いのかなと思っていたところ、学校のテニスコートで元気に走り回っている姿を目にしたときは、なぜか頭に来て気になりだして、出会って１週間で「朝食係に任命する」と言って付き合いがはじまったんです。

言葉通り、毎朝タマゴサンドを作ってきてくれたんです。そのタマゴサンドを食べて、こんなに美味しいものがあったのかと思ったほどです。

編集部：では、タマゴサンドは恋の味ですね。

吉澤：イヤ～実は後でわかったのですが、優美さんの家は喫茶店も経営していて、その喫茶店で作ってもらって持ってきていたんですよ。プロの味ですから美味しいのは当たり前ですよね。

編集部：奥様の優美さんにお聞きします。高校時代の吉澤さんはどんな学生でしたか？

優美：あまり学校にいなかったような…勉強より友達を大事にしていて、部活も楽しんでいて高校生活を満喫していたように思います。

＊インタビュー中、吉澤さんの湧き出る高校時代の思い出に、圧倒されてしまうほどのシオン愛を感じました。奥様もおっしゃっていましたが、昔から友人を大切にして人の喜ぶ顔を見るのが好き！その気持ちは今も変わらないようです。ただ…今回紙面で紹介できない話もいっぱいで残念です。どんな話かは写真を見て想像してくださいね。やんちゃな吉澤さんですから…

吉澤さん（右）と優美さん（左）

MY－LIFE

仁平 レイ子
（旧姓関・3回生）
高萩市在住

感謝と祈りの日々

手仕事が大好き。刺し子、刺しゅう、アップリケとオールマイティだ。4人の娘さんの子供時代の洋服はほとんど手作りした。亡くなったご主人が永年、キリスト教聖児幼稚園（現、茨城キリスト教学園附属幼稚園の前身）園長だったので、外国人宣教師との交流があり、ケーキやシュークリーム等の洋菓子を作ったり、中華菓子も得意で主催した料理教室はいつも盛況だった。

現在は、四女夫婦、孫たちと同居している。週の半分は近くのデイサービスに通い、日曜日は教会で聖書のことばに耳を傾け、祈り、讃美歌を歌う。クリスチャンのレイ子さんにとってこの習慣は何十年も変わらない大切な時間だ。リビングの傍らにはハーモニカとウクレレ。思いたった時にそっとメロディーを奏でてみる。

「いつも周りの人達を思い、気配りを忘れない母を尊敬しています」と、娘の知恵（ともえ）さん。「神さまに感謝しながら毎日を過ごしています」と、レイ子さん。愛に包まれた家族の日々はこれからも続いていく。

すっかり岡山県人です

中学生の時、家の近くにあった教会で、本校の斎藤繁雄先生から英語を教えていただいたことが、入学志望のきっかけになった。遠距離のため3年間の寮生活がスタートした。

冬は、ルームメイトと火鉢に炭を起こして暖をとり、クリスマスには男子寮の仲間達と讃美歌を歌いながらプレゼント交換をした。ワンダーフォーゲル部の東北旅行では、大嵐の中、粉末のオレンジジュースの素に雪を入れて、震えながら喉を潤したり、ソプラノのパートを担当したコーラス部では、昼休みや放課後に、顧問の梅津直子先生から、童謡やラテン語の宗教曲を教えていただいた。また、先生の計らいでお招きしたプロのピアニストやバイオリニストによるナマ演奏の音楽会など、その1コマ1コマが懐かしく思い出される。

最近は、夫婦で携わってきたポリプロピレンを原料に製品を生産する繊維工業会社を息子さんにバトンタッチした。昨年からオカリナを始め、共鳴する清々しい音色にハマっている。

森谷 美知子
（旧姓小口・13回生）
岡山県井原市在住

斎藤 智子
（23回生）
東京都在住

生涯国際協力

高校時代の思い出は、外国人教師のお宅を訪問し憧れていたにも関わらずとても緊張したことと、野球部の勝敗に一喜一憂したことなどだった。

卒業後、カナダの高校へ1年留学した。帰国後、国際農業研修センターで青年海外協力隊OBと知り合い、技術があれば興味があったアフリカに行けることを知り、そして思い立ったら一直線、看護学校に入学し、助産師となった。

助産師として3年間水戸済生会病院に勤務後、青年海外協力隊としてアフリカのマラウイ国で助産師としてへき地の県病院で2年間従事した。この時の「互いの立場に立ち、助け合いながら」という経験が、国際協力の原点になっている。

その後、母子保健プロジェクトでアフリカ（マラウイやガーナ）や、アジア（ラオス）で働いてきた。2022年5月からはガーナの医療従事者へ母子手帳の研修を現地関係者と実施している。

今後も体力気力知力が続く限り、形は変われども国際協力に関わって行きたい。

●いま輝いてます●

Bright

輝きに満ちた人生

空き家リノベーションを提案

（株）松屋不動産
作山 勝弘（27回生）いわき市在住

その頃の学園には自由がたくさんあったと、佐山さんは言う。

自由とは、求めればNOとは言われず、努力をすればなんとかなる環境だった。

当時、硬式テニス部をつくりたいと思い始めた時、真剣に取り組めば先生の協力を得ることが出来たが、理想と現実の間で相当な努力が強いられた。

それが面白く楽しい事でもあった。四大の先生と交渉し、テニスコートを少しずつ借りることが出来、なおかつ短大にあったクレーコートも整備する条件で借りられた。クレーコートの整備では、手押しローラーと耕運機に付けたローラーで石灰を撒きながら必死に整備、練習することも無く整備で一日が終わることもあった。

部員は当初、同級生の兼子公孝さんと作山さんとの二人だった。その後女性が2人、男性が数名加わり（あとは覚えていない）少数精鋭だった。テニス部顧問になって頂いた先生はテニスのことを何も知らないだろうと思われる国語の松﨑健一郎先生。「君たちがやりたいのだったら協力しよう」と名前を借りることが出来た。

松﨑先生とは卒業後もご縁が繋がっていて、東京へ上京後も、当時、家賃負担の関係で同級生の大平衷一さん（故人）と同居していたある日、先生が東京へ上京したついでにアパートに立ち寄って下さった。数人の同級生と来るのを待っていたところ、当日、夜来るはずの先生が一升瓶を抱えて早朝到着、何があったかわからない。先生が書いた本「親鸞」を送って頂いたこともあった。

作山さんには3人の子がおり、内2人が本校に通うことが出来た。長男の面接時、松﨑先生より開口一番「父さんは何歳になった？元気か？」と聞かれたそうだ。先生が在籍していたことに驚いた。長男の入学式列席のために学園に行った時、遠くから作山さんを見かけた先生が「オ～～」と言って挨拶を頂いたことを今でも思い出す。

作山さんは25歳の頃から街づくりに興味を持ち市民団体に参加。その時出会った街づくりの先生の講義を受けた後、午前2時までパフェを食べながら語り合った時が良き思い出である。その先生も亡くなられましたが、「月に一度は東京を見に行きなさい」との言葉を今でも忠実に守っている。今では羽田空港がテリトリーの一部になってる。

27歳前後の頃、街づくりの団体活動では思い込みが強く、年上の一級建築士の先生が話す理想論に幾度も噛みつき、ウザッタイ奴と思われていたほどだったが、今は

甲子園球場に立ちたい

野球漬けの高校生活。それは朝練から始まり、学食のおじちゃんが作ってくれたコロッケやハムカツごはんで朝食。睡魔と闘いながらの授業、そしてお待ちかね放課後の部活、時々駅近くのさっぽろ屋のラーメンでお腹を満たし、そして帰宅。家族以上に部活仲間と苦楽をともにした。

卒業後に杉浦聖美先生と会う機会があり、野球部員数人で焼肉チェーン店でごちそうになった。そこでのサービスの質の良さに驚きそれをきっかけに、その後大学4年間をそのチェーン店でバイトして接客業を身に付けた。

卒業後都内のホテルに就職し、現在は水戸のホテルで営業マンとして活躍している。さらにいばらき観光マイスター、地酒ソムリエの認定者でもある。

また、職場の外では草野球チームを作ってプレーを楽しんでいる。そして夢は阪神甲子園球場に立つこと。“マスターズ甲子園”という大会があって、地区予選で優勝すると叶うと言う。それには先ずキリストOBでチームを作り、茨城県代表に勝ち進むことだ。高校球児であれば誰もが一度は夢見ること、それを思い続けるNICEガイである。

小沼 一誠（53回生）大洗町在住

関 貴史（43回生）水戸市在住

高校とともに

今にして振り返ると、キリスト高校とのご縁がずっと続いているようだ。

水戸市の千波湖畔にある「好文café」を経営している関貴史さん。後から気が付いた事だが、関さんの恩人がキリスト高校のPTA会長をつとめた方で、その方との出会いがきっかけで今の仕事をしている。

また「好文café」では、時々SAZAコーヒーがプロデュースする学園のコーヒー“ローガン・ファックス”を購入されるお客がおり、おそらく高校OBの方なのだろうと思うこともある。

振り返れば高校生活が彼の人生の礎を作り上げたようだ。

よく言われることだが、キリスト高校ってとても自由な校風だったお陰で生涯付き合える級友に大変恵まれて、今でも年に何度か集り親交を深めている。卒業して30年過ぎているが、身近に同級生や先輩後輩と接する機会が多いせいなのか、どうしてもキリスト高校時代に思いが馳せて優しい気持ちなることがあるようだ。

これまで仕事が楽しくのめり込んだ感があるようだが、間もなく50歳を迎えるにあたり、「住んでいる水戸に貢献できる活動を行いたい」と言っていた。

梅酒好きな関さん、活動後は水戸の梅で乾杯ですね。

ヤンチャだった高校時代、今は

妻と子供２人、そして猫５匹の家族を持ち、不動産業を営んでいる。不動産の中でも、現在力を入れているのが宅地造成からの分譲である。地盤から責任を持って宅地販売をしている。

社員からも慕われているが、高校生の頃はちょっとヤンチャな生徒で、学内での思い出よりも学外での遊びに夢中なっていた。当時流行のビリヤード、ボーリング場に出入りし、喫茶店で仲間と群れたりしていた。

部活は、１年生時にバレー部に所属も１年足らずで退部。次にバドミントン同好会に入るも続かず、学園祭等の行事に積極的に参加した思い出もない。

入学当初は「キリスト教」「聖書」の授業に軽くカルチャーショックを受け、男子生徒の少なさにも驚いた。

卒業後は、保険会社の代理店を営み、同時に実家の不動産の手伝いもしていた。そして父の後を受け継ぎ今となっている。

付き合い程度にゴルフをし、仲間や家族と国内外への旅行も楽しむが、これという趣味はない。

やはり仕事優先になり、当面の目標、夢は現在メインで手掛けている800戸余りの大規模分譲エリアの完売である。

郡司 竜一（33回生）水戸市在住

横須賀 洋希（73回生）山梨県都留市在住 都留文科大学教養学部在籍

希望に満ちていたはずの３年間

当人73回生、母（旧姓：川崎美希子）もOB。今年で大学２年生となり、青春を謳歌中。

コロナ感染症が流行し始めた年に入学、最初からオンライン授業で高校生活がスタート。自宅学習は約三ヵ月間、毎日メリハリのない授業と宿題に追われる毎日で、クラスメートとの交流もほとんど出来なかった。制限下の中でようやく通学ができるようになり交流が始まったが、マスクで顔半分しか見えなかったため、見分けるにも時間もかかってしまった。修学旅行は当初、沖縄を予定していたが、これもコロナの影響で軽井沢に１泊のみで終わってしまった。それでも、３年時の高校野球県大会に応援に行ったことは特に印象に残っいて、すごく楽しかった！

大学受験時は苦手な小論文を克服できず、希望する大学を断念しかけていた時、西内貴人、冨田政行両先生のご厚意で猛特訓を受けることが出来、弱点を克服、現在の第一志望の大学に合格、あらためて感謝。

感染症による不自由感があった３年間だったが、茨キリの生徒として過ごせたことは、本当に喜びであった。

只今、独身を謳歌中！

高校時代は、テニス部に所属、毎日が暮れるまでラケットを振っていた。

１年生の時、東日本大震災に見舞われ通学出来ない時期があった。そんな時も、被害が無かった地元小木津町のテニスコートに毎日通い、先輩・後輩とテニス三昧の毎日であった。その甲斐もあって、茨キリ高はじめてのテニスの関東大会に3年連続団体戦に進出することが出来た。

テニス、テニスの高校生活は勉強する間も少なかったが、その後、北海道大学に進学、卒業後そのまま、JTB北海道に入社。現在も北海道にて熱血ツアーコーディネーターをして、お客様に夢を現実にするためのお手伝いをしている。

現在は法人向けのツアー等を主に担当しており、特にプロ野球選手の試合遠征にツアーコンダクターとして従事している。過去には日本ハムファイターズ時代の大谷翔平選手等の遠征に担当として同行したこともあった。高校時に養ったスポーツ精神が今の仕事にも生かされている。

多賀 俊明（63回生）北海道在住

なんでも話せる良い仲間となっている。

また、地域初の民間資本１００％出資の街づくり会社立ち上げに協力、丹精をこめて拠点点作りをしたが、継続できずに現在その拠点だけが残ったため、そこを中心に「小しずつ」会社店舗を増やしている。

仕事は開業39年目を迎えるいわき市小名浜にある不動産屋。今まで町おこしとしてボランティアのいわき支部支部長、小名浜地区商店会連合会長（イオンモールいわき小名浜出店時の商店連合会代表として年１２０回の会議をこなし、テレビ東京に出たこともあった）。また、毎年８月に開催されているいわきおどり小名浜大会委員長なども経験、今はいわき商工会議所議員の一員として地域のために活動している。

これからも地域の魅力作りに取り組み『よそ者、若者、女性、知り合った海外の方々』とコミュニケーションを取りながら、地元いわき市小名浜の魅力づくりの中心的役割を担う、優しく紳士的な方である。

TOPICS

40年かけた壮大な ドキュメンタリー写真家

中井川 俊洋さん（28回生）

「日立鉱山に生きた人々」企画展会場で

日立鉱山は1905年開業。日本四大銅山の一つに数えられ1981年９月30日に閉山、76年間の幕を閉じた。写真家の中井川俊洋さんは閉山までの２か月間ほぼ毎日通い詰めそして閉山の日を迎え、閉山後の作業員転職先、そして現在の彼らを写真に収めた。

写真が趣味の中井川氏は、風景や人物、伝統ある祭りなど身近な日常を写真に収めていた。そしてキリスト高校に入学し写真部顧問の中野豊先生にドキュメンタリー写真の指南を受けて、写真家の基礎を叩き込まれながらも、日立鉱山とそこでの生活など写真を撮りつづけた。

その後、日大芸術学部に入り写真学科ドキュメンタリー写真専攻だった中井川氏は「栄光ある鉱山の最後を見届けたい」と考えて卒業制作のテーマとして閉山の記録写真を撮ることにした。

大学卒業後は、カメラマンとして生計を立てようとしてもすぐに活躍する場は無く、そんな時に閉山後の坑夫労働者のその後の行方が気になって彼らを追いかけることにした。全国の系列鉱山や全く違う職に就いた人。さらにはアフリカの鉱山に行った人まで現地に飛んだりして、約3年間バイトをしながら写真を撮り続けた。

その後は専属カメラマンとしてスクープカメラマンとなり、写真雑誌の『フライデー』で２０年間スクープ写真を撮り続けその後、『フラッシュ』そして現在は『女性セブン』を中心にフリーカメラマンとして活躍している。今ではスクープ写真業界では一人で写真撮影、取材、さらに現地(海外含む)コーディネートできる人は中井川氏以外にいない、と言われるほどの逸材である。

また若いころ日立市郷土博物館で仕事をしていたお陰で、今では学芸員資格取得のための写真講座を大学で開いたりしている。

そんな中、スクープカメラマンとして順風満帆と周りからは見えるが、「写真家としてどうなの？」と言う葛藤の日々も一緒に重ねていたと言う。

出品作の１点「入坑」

そんなある日、大みかの実家の押し入れから、今からおよそ40年前の日立鉱山の写真ネガを取り出しデジタル化して、写真にトーンの奥深さがあることに気づき鉱山に生きた人々の鉱山魂を感じたそうで、あらためて実家で写真展を開催した。そこで写真を見に来た人がある一枚の写真をみて「これ、俺です！」と訪ねてきた。

これにはものすごく驚いたことだろうと想像できる。当時の親が日立を離れずに近くに住み続けてくれたからにほかならないことだ。

そこで40年経った今、彼らに再び会うという使命のスイッチがONしたのだ。幸いなことに幾人かと会うことができて瞬く間に当時の雰囲気にタイムスリップしたことであろう。そして面影は残っているが今日まで生き抜いてきた彼らを撮影した。

この瞬間、ここですべてが繋がり４０年と言う壮大なドキュメンタリーが成就した。それを記念して写真集『日立鉱山に生きた人々』を出版した。

今では、スマートフォンで撮影したデジタル写真は、撮影した時点できれいに加工されているという。中井川氏は「記録写真家として、事実に忠実な表現、非演出を心掛けた写真を撮りたい」と言う。

「40年前に撮った色々なフィルム写真を今あらためて見直すと、当時良かったと思った写真より、こっちのほうがいい写真だと思うことがある」と言う。それはまさに忠実な表現がもたらしたものであろう。そして「40年前の写真だが進化しているようだ」とも言っている。記録写真とはずっとずっと生き続けているのですね。

そういった記録写真を撮り続ける写真家をこれからは応援したいと思います。

● 2023 年度同窓会への寄付者一覧 (70 件)

〈 合計金額 387,000 円 〉ご好意ありがとうございました

4	笠原令子	20	岩本律子	34	小林れい子
5	花田正善	20	藤原智子	34	武田邦子
8	安藤佳世子	20	沼田敏江	34	石井由香
9	関口紀江	20	菅原卓子	35	菅原貴子
9	今村純一	20	松田玲子	36	鈴木直子
9	中林由紀子	20	稲田和子	37	礒﨑幹子
11	戸張紀子	21	南田文子	37	宇須井一江
11	佐川幸子	21	鈴木和子	38	黒澤佳代子
11	大谷俊惠	22	長谷川久美子	38	村山めぐみ
11	和田節子	23	藤田芳彰	45	西村真樹
12	倉持征敏	23	佐藤芳子	46	井上直行
12	館　功代	23	弓野孝子	51	鈴木仁美
12	北瓜恵子	23	武士一枝	64	川端春希
14	丹羽智恵	24	前島裕子	68	瀧田　優
14	井坂敬子	25	富沢圭子	70	丹　息吹
15	赤井美智子	25	石田進一郎	71	森下実紀
15	若林俊夫	27	大森明美	72	瀧田　蒼
17	若松守正	28	富岡明美	72	川﨑康裕
18	郡司任孝	29	安達和子	73	須田陽太郎
19	礒崎幸子	30	金澤邦博	7	旧職員 原田きよ
19	西連寺節子	32	村田俊一	旧職員	菅原信子
20	村田　亮	33	川上光彦	旧職員	梅津直子
20	大須賀恵美子	33	百瀬弘美	匿名	２名

「ZION」発行への寄付のお願い

同窓会は、今年度新たに74回卒業生260名を迎えました。
毎年2万人以上の卒業生への「ZION」発行と送料などで200万円以上の経費が必要です。皆様のご協力をお願い致します。
金額については1口2000円以上とし、入金方法は現在のところ、同封の「ゆうちょ銀行」払込取扱票（ブルーの印字）をご使用下さい。

笑顔満祭・シオン祭

テレビでもお馴染みの四千頭身やトム・ブラウンなど、大いに笑わせてくれた75回シオン祭。高校同窓会のブースでもサザコーヒー販売を始め、フリマ、古本市で賑わった。収益も112,000円となり前回を上回った。

76回に向けてさらにパワーアップした企画で名物と言われる模擬店を目指したい。

■ 第 18 回卒業生（S43 年 3 月卒）へのお知らせ

18 回卒業生は、6 月のホームカミングデイに参加・合流することで、同窓会とします。卒業以来 56 年、前回同窓会より 7 年ぶりとなります。ホームカミングデイで会いましょう！
＊連絡先＝18 回卒・同窓会幹事　福地正文　0294 - 74 - 5186

開催しました!!

■ 第 15 回卒業同期会

喜寿を迎える年齢になり、2023年5月28日・29日に国民宿舎「鵜の岬」で実施。60年ぶりに再会した友もいて、思い出すまでにしばし時間を要したもののそのうち面影がよみがえり、二次会まで時の経つのも忘れて楽しいひと時を過ごした。

■ 同窓会東京支部会

2023年10月14日（土）、日の出埠頭からの「東京湾シンフォニークルーズ」として開催。北は宮城県、南は大阪府から36名が参加。懐かしい高校時代の話で大いに盛り上がり、次回支部会での再会を誓い合った。

全国高等学校総合文化祭に出場

■ハンドベル部

2023年８月4日（金）、茨城県高等学校文化連盟器楽管弦楽部門で推薦され、県代表として鹿児島川商ホールで宗教曲「Make me a channel of your peace」とハンドベル技法が詰まった「TEMPEST」の2曲を演奏した。

翌日は、普段、教会訪問演奏を年1回程度行っている為、日本キリスト教団鹿児島加治屋町教会でも演奏し、教会員や地域の方々にハンドベルの音色を楽しんで頂いた。

部員23名（内男子7名）。男子の入部で、力強いベルの音と良い響きが出るようになった。鳴らすタイミングを合わせることが最も難しく、チームワークが要求される。

12月14日にはＮＨＫテレビ「いば６」（茨城県限定）に出演。中高吹奏楽部、中高コーラス部と共にクリスマス曲を披露した。

第46回日本分子生物学会年会で発表

■サイエンス部

2023年12月8日（金）、神戸ポートアイランドで「ハイブリッド紙の作成」と題して2名が発表。

農業王国茨城県から大量に出る米の「もみ殻」の処理に困っていることに着目。5～6年前から世の中に役立つ利用方法の研究を始めた。今回は紙の主成分のセルロースがもみ殻に含まれていることから、もみ殻から紙を作成することをテーマにした。

サイエンス部は15年前に創部し、今年度は東京理科大学理窓会主催の坊ちゃん科学賞研究論文コンテスト高校部門でも同じテーマで入賞している。22年度も「粘菌を使った交通網の作成に向けて」で入賞している。

興味深いもの、面白いものを楽しく研究していて、テーマも個性的だ、と審査員から高い評価を得ている。

第35回全国高校駅伝競技大会に出場

■陸上競技部（女子）

2023年10月28日、ひたちなか市総合運動公園周辺周回コースで行われた、女子第35回全国高校駅伝大会の県予選大会で、4年連続25度目の優勝を飾った女子陸上部は、同年12月24日、京都市・たけびしスタジアム京都で行われた全国大会で21位の結果となった。また、令和6年2月2日に笠松運動公園周回コースで行われた県高校新人大会で、2大会ぶり24度目の頂点に立った。次回各大会でのさらなる飛躍を期待したい。

● ご勇退されました。ありがとうございました!

22 年 3 月・Voss,Randall Wayne 先生（現・本中高招聘校長）
・野木敬子先生（現・本中高非常勤講師）
23 年 3 月・熊﨑伸一郎先生
24 年 3 月・木名瀬利子先生（現・本中高非常勤講師）
・東海林悠里先生（現・本中高非常勤講師）
・小金井美咲先生・徳田恵美奈先生
・Miller,Matthew James 先生

●ご逝去されました

・岡草路先生・齋藤由治先生

編・集・雑・感

編集の取り纏めを任され、これまでと違い全ての記事内容を熟読した。そこでOB・OG達が様々な場面で生き生きと活躍し、また感謝の気持ちで日々を過ごしていることをあらためて感じ取った。

今年は辰年。陽の気が動いて万物が振動するので、活力旺盛になって大きく成長し、形がととのう年だといわれる。一歩また一歩と踏み出す足音が聞こえてきます。（I）

★本誌編集スタッフ募集！

● 編集スタッフ
佐藤寿子・岡田貴子・手塚正子・荒川眞理子
原田順子・松田玲子・高野雅之・池ノ辺浩・安達和子
佐藤源治・芳賀友博・黒木亜希子

● デザイン：M-at

和雑貨・器・洋服など
正直や
吾玉制作体験もできます!!
小松香織（37回卒）
水戸市泉町1-2-26 2F TEL080-8920-8039
（水戸市民会館すぐそば）

CAFE & GALLERY 大みかの木 MUSIC & PHOTO STUDIO
スタジオ＆カフェ
音楽発表会
楽器練習
各種教室
撮影／配信
写真展／セミナー
レストラン／パーティ
ピアノ2台・音響機器・配信設備・業務用キッチン・撮影機材完備
中井川俊洋 28回卒
日立市大みか町6-17-60
090-2322-5140
https://nakaigawa.tokyo/oomika

おもてなしサロン
ROSE CAFE
主宰 潮田 菜々子（39回卒・旧姓 鈴木）
〒310-0033 茨城県水戸市常磐町
http://www.rosecafe7.jp/

ガス機器修理 水まわり修理 電気のご契約
ガスも電気もリフォームも！暮らしの事はお任せください！
砂川二郎（38回卒）
TOKYO GAS GROUP
Enesta エネスタ多賀
エネスタ多賀 TEL 0294-36-2520

天心が想い 大観が描いた五浦
五浦観光ホテル 別館 大観荘
常務取締役 女 将 村田和華子（35回卒）
北茨城市大津町722 TEL 0293-46-1111(代)
http://www.izura.net/

NEXT・カワシマ
川島プロパン・住まいるカワシマ・らぽーるカワシマ
住まいのコンビニ
らぽくらぶ
http://puron.co.jp
本社:茨城県ひたちなか市津田2941 TEL:029-273-8751
日立:日立市川尻町5丁目4-15 TEL:0294-42-7111

茨城ゼミナール
進学教室・フリースクール・中高大受験
キリスト、茨城中クラス・看護科受験
西宮 秀樹（31回卒）
ひたちなか市表町5−1 メゾンドビル2F ドンキホーテ隣
TEL090−3246−1760

建築・土木・住宅・リフォーム
INOUE
株式会社 井上工務店
茨城県ひたちなか市和田町1-10-13
Tel:029-263-0211 Fax:263-0215
http://www.inoue-koumuten.jp

フランス菓子 ルブラン
水戸市千波町370 TEL.029-241-1991
http://www.leblanc.co.jp

建築設計・監理・既存建物調査
磯山設計事務所
一級建築士 磯山 治（18回卒）
〒309-1736 笠間市八雲1丁目5-16
TEL0296-77-0476 FAX0296-78-2365

焼肉レストラン
風林
大小御宴会歓迎・送迎バス完備
青柳店 ☎(227)7606（青柳公設市場通り）

Anchor Staff アンカースタッフ
●人材派遣業務 ●プロモーション業務
株式会社アンカースタッフ
取締役 黒木 亜希子（37回卒）
水戸市袴塚3丁目3-52 アンカースタッフビル
Tel.029-350-1551 Fax.029-350-1552

いいものを創りたい。
㈱笠間印刷所
水戸市本町2-1-26
TEL 029-221-3048
E-mail:kasama@proof.ocn.ne.jp

鵜のまち日立の うかるくんともうかるくん
茨城県日立市非公認キャラクター
金運上昇！もうかるくん
必勝合格！うかるくん
https://www.facebook.com/Ukarukun
Email ukarukun@hkp.co.jp

HOME ROASTED SAZA COFFEE SINCE 1969
鈴木誉志男（10回卒）・鈴木太郎（40回卒）
本社:ひたちなか市共栄町8−18
TEL 029-274-1151
www.saza.co.jp

★広告掲載（有料）希望される方ご一報ください

茨城キリスト教学園高等学校同窓会報
ZION（シオン） No.44
●発行日＝2024年5月1日
●発行人＝川上光彦
●発行所＝茨城キリスト教学園高等学校同窓会
〒319-1295 茨城県日立市大みか町6-11-1 TEL.0294-52-3215(代) FAX.0294-53-9271
https://www.icc.ac.jp/zion/ E-mail:ih-dousou@icc.ac.jp